

# e-ビジネス・オンデマンド

本誌36号では、「コンピューター資源の共有」を実現するインターネット上の異機種混合・分散技術としてグリッド・コンピューティングを特集しました。そのグリッド・コンピューティングが新しいビジネス・モデルとして想定しているのがe-ビジネス・オンデマンドです。オンデマンドは「必要なときに必要なだけ」という意味。電気・ガス・水道のように、ITインフラストラクチャーやアプリケーションなどのビジネス・プロセスを必要に応じて利用し、使用した分だけ支払えばよくなります。情報リソースは、これまで企業の資産として持たれ、各企業でプログラムをつくり、管理するのが「常識」でした。しかし、e-ビジネス・オンデマンドの登場により、アウトソーシングを含め、コンピューター利用の選択肢が大きく広がることとなります。e-ビジネスは今後、企業内のみならず外部の企業や機関ともプロセスを連携するダイナミックな統合の段階に入っていきますが、IBMでは「e-ビジネス・オンデマンド」を、そうしたe-ビジネスの新次元におけるビジネスとコンピューティングの新しい動きを総括するキーワードとしてもとらえています。本号の「Management最前線」では、e-ビジネス・オンデマンドへのIBMの取り組みのほか、その実現に不可欠なテクノロジーとしてオートノミック・コンピューティングを取り上げています。論文には、先進的なIT研究の成果、現場でのシステム構築の実践を踏まえての考察など、多彩なテーマを収載しています。

## Perspectives in this Issue

### e-business on demand

In the previous issue (No. 36), we carried a feature on grid computing as the Internet mixing and decentralizing technology for different types of machine aimed at achieving the sharing of computer resources. "e-business on demand" is IBM new Agenda to redefine the way computing, applications and processes, is based on the new infrastructure technologies like grid computing. "On demand" here refers specifically to providing the required quantity exactly when it is required. Just as with electricity, gas and water, a better system will come about if people are able to use IT infrastructure, applications and other business processes as needed and then pay only for what they have actually used. Information resources have previously been regarded as corporate assets, and the standard approach has involved individual companies creating and managing their own programs. However, with the appearance of "e-business on demand," there has been an enormous increase in the range of options available for the use of computers. e-business will be entering the stage of dynamic integration in which process linkage occurs not only inside companies but also with outside companies and organizations. At IBM, we are looking at "e-business on demand" as a key term relating to the overall control of new developments in business computing in such new e-business dimensions. In "Management Forefront" in this issue, we take a look at how IBM is tackling the field of "e-business on demand" and at autonomic computing, a technology indispensable for its realization. The papers cover a wide variety of topics including the results of the most recent IT research and studies based on practical on-site system construction.

## e-ビジネスの三つの発展段階

企業情報システムの変遷を振り返ってみると、大きく三つの世代に分けられます。1980年代半ばまでのメインフレーム世代、1990年代半ばまでのクライアント/サーバー世代、そして、それ以降のネットワーク世代です。この間、ITへの投資も年々増加し、米国の固定資産に占めるIT資産比率は現在およそ12%です(資料: US Department of Commerce)。しかし今後は、先行き不安定な経済予測もあり、IT資産比率もそんなに伸びないだろうと予測されています。コスト削減への要求がさらに高まる中、IT資産も「所有」から「使用」へという意識が強まり、また、オンデマンドなど資産の変動費化が普及するからです。

さて、IBMがe-ビジネスを提唱したのは1996年のことですが、このe-ビジネスにも三つの発展段階があります(図A)。

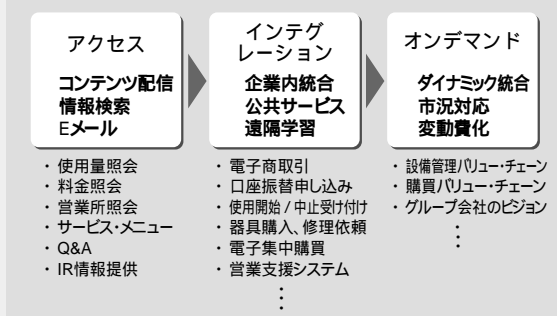
最初の段階は、ネットワークへのアクセス。単純な情報検索

によって、さまざまな照会ができるようになり、企業が情報発信のためのWebサイトを開設する初歩的な段階です。

続いて、アクセスからトランザクションに移行し、ITとビジネス・プロセスがインテグレーション(統合)する段階に入ります。この段階では、口座振替や商品売買、株取引などの電子商取引はもちろん、遠隔地教育なども盛んに行われます。

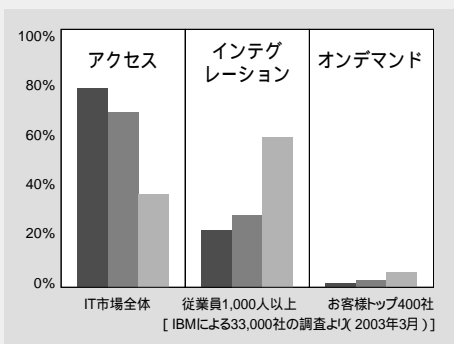
そして最後が、ビジネス・プロセスのダイナミックな統合を通してバリュー・チェーン全体にわたる変革を促進・実現する段階で、IBMではこの段階をオンデマンドと定義しています。この段階では、絶えず変化する市場の動向を企業がリアルタイムで察知して迅速に対応し、コア・コンピテンシーへの集中化を進めて競争力を強化し、戦略に応じてビジネス・プロセスやコスト構造を柔軟に変化させることができます。

現在、先進諸国の企業のおよそ4分の3は第1段階に入り、世界規模の大企業の半分以上が第2段階への移行、ないしは実践を視野に入れています。まだまだお客様の



図A: e-ビジネスはオンデマンドへ

の企業規模によって、その進展度合いにばらつきがあります(図B)。オンデマンドの段階に到達しているのは、IBMのお客様の中でもごく一部です。しかし、この段階に至ってこそ初めて、競争優位や新事業開発など、e-ビジネス本来の利点を享受することができるといえましょう。



図B: e-ビジネスの進展度合い

そこで、お客様にあえてお聞きします。「絶えず変化する環境に迅速に対応することができますか?」「競争相手と差別化し、コア・コンピテンシーを支援するプロセスは何ですか?」「業界をリードするベスト・プラクティスやビジネス・プロセスを描くことができますか?」「IT資源の活用度を飛躍的に改善することができますか?」 そのお答えの一つでもつまずきがあれば、e-ビジネス進展のスピードをさらに加速することが大切でしょう。